

平成18年度文化庁「芸術団体人材育成支援事業」子どもの文化資料編纂事業



日本の子どもの文化2007年版

子どもの「メディア接触」と 「アートスタート」に関する調査研究報告書

NPO法人 子どもNPO・子ども劇場全国センター

協力：NPO法人 子ども劇場千葉県センター／中央大学研究開発機構

子どもの「メディア接触」と
「アートスタート」に関する調査研究報告書

■ 調査研究体制 ■

【調査研究統括】

高比良 正司 (特)子どもNPO・子ども劇場全国センター 代表理事
中央大学研究開発機構 教授

【調査研究責任者】

稲垣 秀一 (特)子どもNPO・子ども劇場全国センター 調査研究部長

【調査研究委員】

大森 智恵子 (特)子ども劇場千葉県センター事務局長

岡田 泰子 (特)子ども劇場千葉県センター理事長

中村 雪江 (特)子ども劇場千葉県センター専務理事

西崎 宏美 チャイルドライン岡山県協議会 代表

船山 慶子 (特)子ども劇場千葉県センター理事

目 次

日本の子どもの文化 2007 年版 編纂にあたって	2
調査研究概要	3

【A】子どもの「メディア接触」と「アートスタート」

第一章

子どもの生活とメディア接触実態調査結果 2005年度・2006年度.....	6
記述式回答(311人)の声から	12
基調講演記録 子どもとメディア接触 ～ 遊びと生活文化のリアル体験を～	15

第二章

ヒアリング NPO法人子どもネット八千代の「アートスタート」の取り組みより	21
(参考資料)乳幼児を対象とした文化芸術体験の現在 ～アートスタートの可能性～ リサーチシート	31

第三章 鳥取県 アートスタートの提言

アートスタートの取り組みから、政策提言へ	34
鳥取県への政策提言として	35

【B】子どもと鑑賞活動

2006 年度子どものための舞台芸術作品	44
2005 年度全国鑑賞活動実績	59

参考資料

文化芸術振興基本法	67
子どもに関する文化芸術振興の提案 ～文化芸術振興基本法 基本方針づくりのために～	77

日本の子どもの文化 2007年版 編纂にあたって

近年、子どもが接するメディアは、テレビ・ビデオ、テレビゲーム、インターネット、ケータイなどそのツールが増えると同時に、メディア接触時間は増大し、押しやられるようにリアル体験は衰亡の一途を辿っているといえるでしょう。

溢れるようなデジタルメディアミックスが生活環境となった親子に、心身発達のリスクが高まると警告が発せられて久しく『子どものメディア接触と心身の発達に関わる調査』（2004年度）によれば、「生きていても仕方がないと思ったことがある」と回答する小学生が約半数、中学生では5割を超え、「自分のしていることに実感がない」と感じる小学生が五割弱、中学生で5割あり、いずれもメディア接触が長い子どもほど否定的な回答率が高くなるのです。そして一方、「死んでも生き返る」という自己中心的な考えもこの調査から浮き上がっています。

こうした状況に「メディアリテラシー」も強く求められ、その必要性は当然のことなのですが、たとえメディアとの付き合いが適正化されたとしても、人と人との五感を通じたリアルコミュニケーションを充実させることなく、子どもたちの「生きる実感」「生きる喜び」「命の輝き」の空洞化が満たされないことは明らかです。

今まさに求められるのはリアル体験の「質」と「深さ」であり、その「楽しさ」「豊かさ」に寄与する触媒として、文化・芸術の持つ深い力に期待が寄せられていることがこの調査から明らかになります。

全国各地で活動を続ける子ども劇場は、福岡で発祥して今年度が40年目にあたり、この「日本の子どもの文化」は文化庁の助成を得て1976年から発行を続け、まさに戦後日本の子どもたちの文化を見つめ続けてきた30年といえるでしょう。

2001年には限りない可能性を秘めて文化芸術振興基本法が公布され、危機的ともいえる子どもたちのおかれた環境と子育ての厳しい状況に対して、乳幼児と親子に向き合う『アートスタート』という新たな活動の萌芽は、芸術文化に携わる人々と市民の手から手へと受け渡されてきた文化財産があたかもこうした時代の命綱として準備されてきた感がいたします。

最後に、私どもの活動に深いご理解により助成を実現し続けてくださいました文化庁に心から御礼を申しあげます。

平成2007年3月

調査研究統括

子どもNPO・子ども劇場全国センター 代表理事 高比良 正司

研究概要

(A) 「子どものメディア接触 vs 文化と遊びリアル体験」調査

① 「子どものメディア接触 vs 文化と遊びリアル体験」調査研究委員会を設置する

② 子ども劇場千葉県センターが、2005年11月、県内72団体の乳幼児をもつ家庭を対象に「子どもと映像メディア接触」についてアンケート調査をした2,579世帯からの回答結果を分析、検討する。

(B) シンポジウムの実施（6月16日（金）千葉市民会館にて）

(A) ①の調査結果をもとに、子どものメディア接触、生活リズム、リアル体験の重要性を子育て中の親・子育て支援関係者などに広く周知するため、遊びと文化体験を保育実践に取り入れている講師、及びパネリストに招き、シンポジウム「子どものメディア接触～遊びと生活文化のリアル体験を～」を実施する。

(C) 2006年度『子どものメディア接触』実態（千葉県）、及び遊びと生活文化体験を促進する『アートスタート』の取り組みについての調査をおこなう。（千葉・鳥取）

(D) 子どもと鑑賞活動質問紙調査

① 2006年 子どものための舞台芸術作品（上演実績）

② 2005年 全国鑑賞活動実績

について、300の芸術文化団体に調査票を送付し、回答を得た結果を集計しまとめた。

調査研究責任者 稲垣秀一

【A】子どもの「メディア接触」と「アートスタート」

第一章

子どもの生活とメディア接触実態調査結果 2005年度・2006年度

基調講演記録

子どもとメディア接触 ～ 遊びと生活文化のリアル体験を～

千葉県における活動より

子どもの生活とメディア接触実態調査結果 2005年度・2006年度

調査の目的

- ここ数年、「子どもとメディア」についての社会的関心が高まり、子どもの心身の発達からも「よりよいつきあいかた」を求める声が医療関係者、保育関係者、教育関係者などからあがっている。
- このアンケート調査は、特に乳幼児とメディア接触の状況を把握し、結果をアンケートに協力いただいた子育て中の家庭、団体、地域に返していくことにより、今後の子どもの成長、発達にとってのよりよい環境づくりの参考や裏付けとする。
- 調査結果は、以下の通り。左列が、2005年度。右列が2005年度の結果をふまえ調査項目を絞り込んで実施した。

「子どもとメディア」実態調査 2005年度

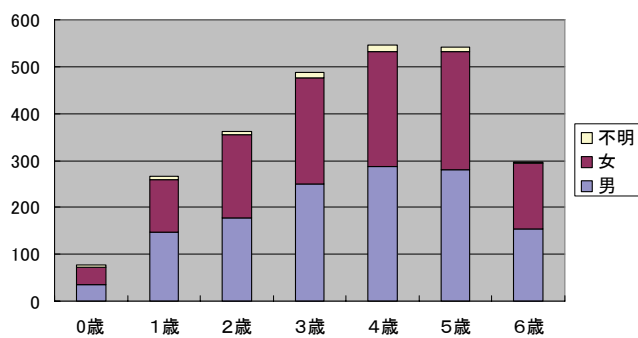
2005年11月、千葉県内72団体の協力を得て、乳幼児をもつ家庭を対象に「子どもと映像メディア接触」についてアンケート調査をし、2,579世帯からの回答を集計した

「乳幼児の生活」実態調査 2006年度

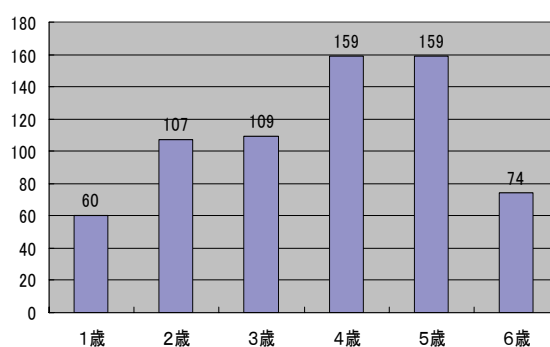
— 映像メディアとの接触を中心にして —

2006年度千葉県Y市 668世帯

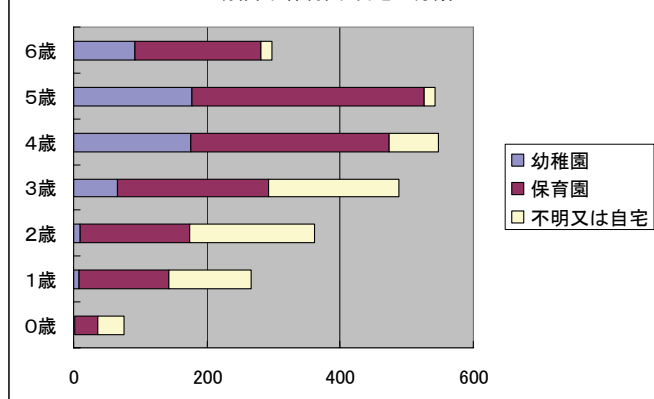
年齢別人数



668世帯の子どもの年齢分布



幼稚園・保育園・自宅の分類

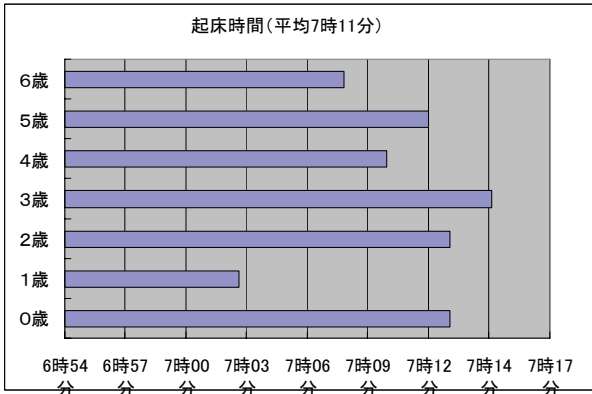


2005年度調査及び2006年度調査の回答者の子どもの年齢層比率の傾向は概ね同様のものとなった。

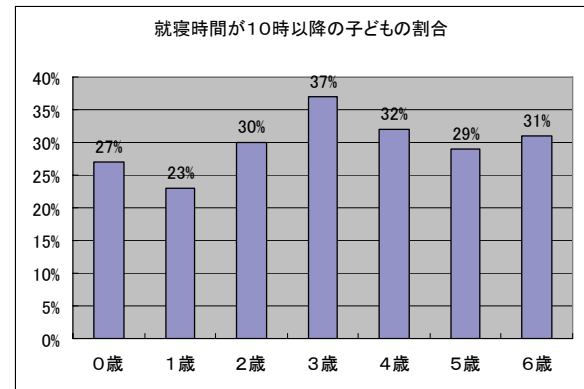
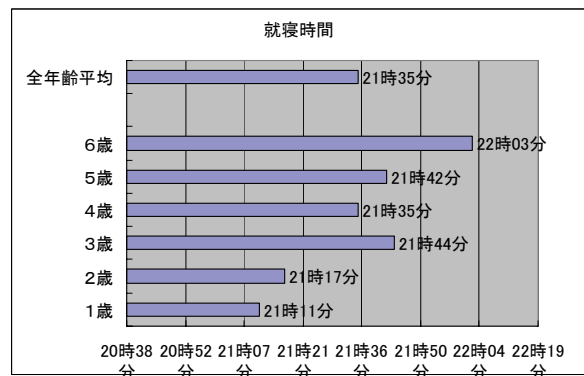
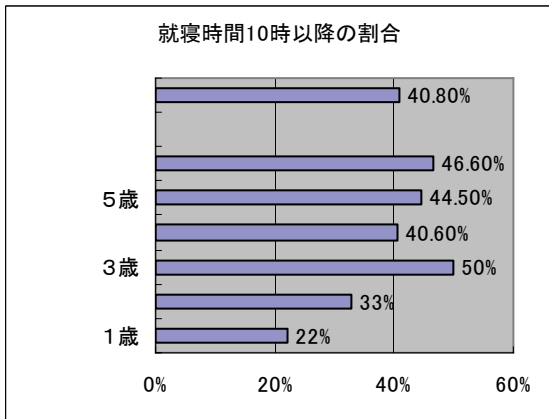
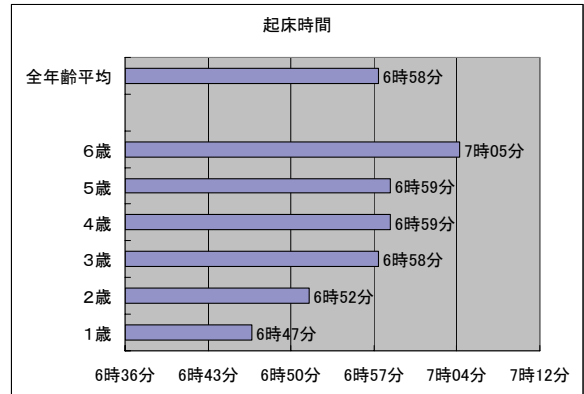
乳幼児の生活時間

起床時間と就寝時間

遊びの好み



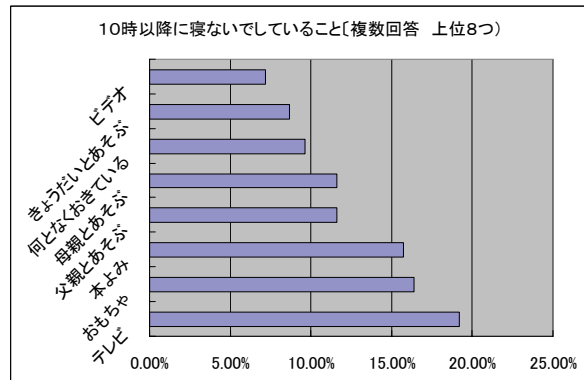
起床時間は2005年度が全平均で7時11分、2006年度が6時58分と若干早い結果となり、2006年度では6歳児が5分過ぎている以外は、7時前には起床している様子が伺える。また22時以降に就寝する子どもは3歳児以上では、2005年度は4割を超えていたが、2006年度では概ね3割以下に減少している。



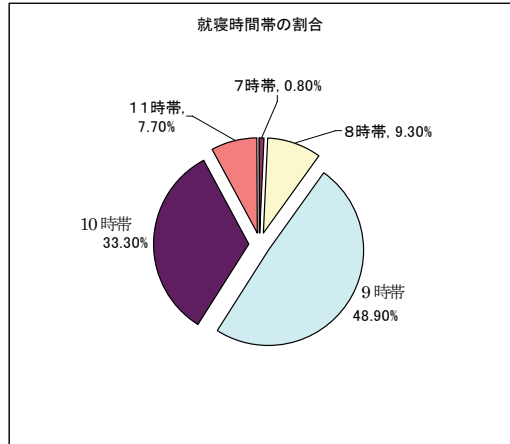
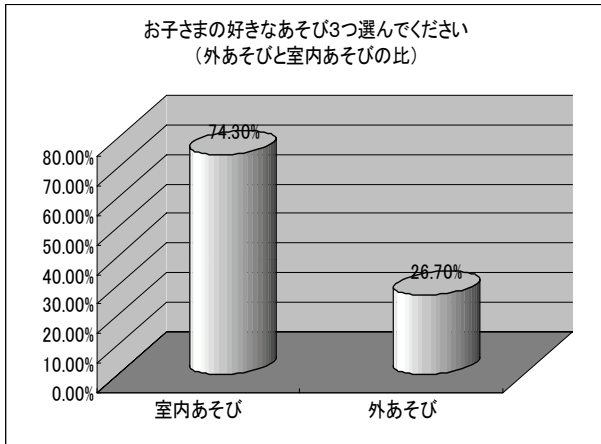
子どもの好きなあそび 10選 (20のあそびから複数回答)

2005年度調査

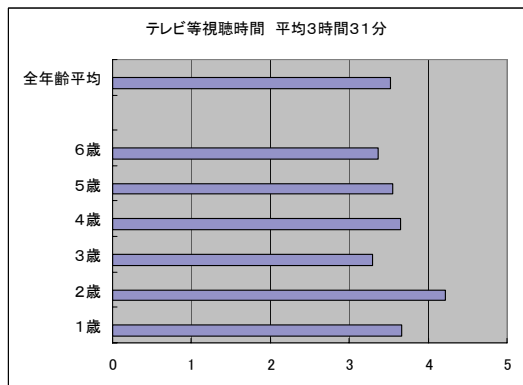
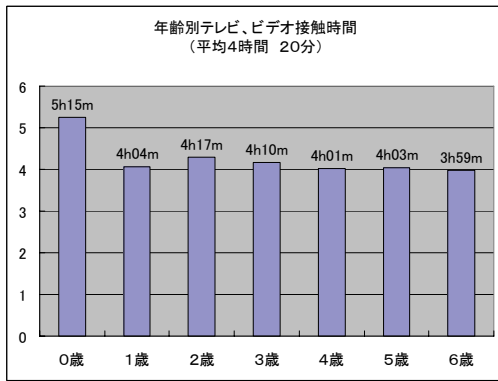
- 1 ままごと..... 1,165人
- 2 お絵かき..... 949人
- 3 絵本・本よみ..... 933人
- ★ 4 公園であそぶ..... 844人
- 5 テレビ・ビデオ..... 809人
- 6 のりものおもちゃ..... 646人
- 7 ブロックあそび..... 640人
- ★ 8 自転車のり..... 483人
- ★ 9 ボールあそび..... 424人
- 10 ヒーローごっこ..... 379人



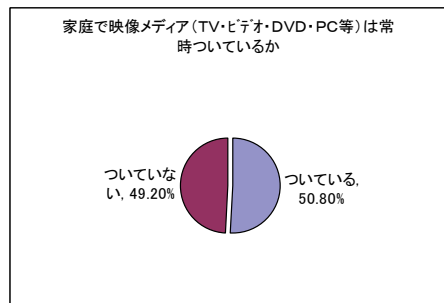
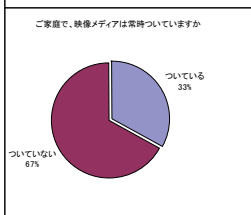
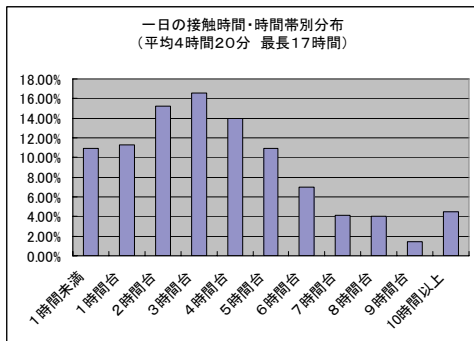
乳幼児の遊びの好み メディア接触の時間



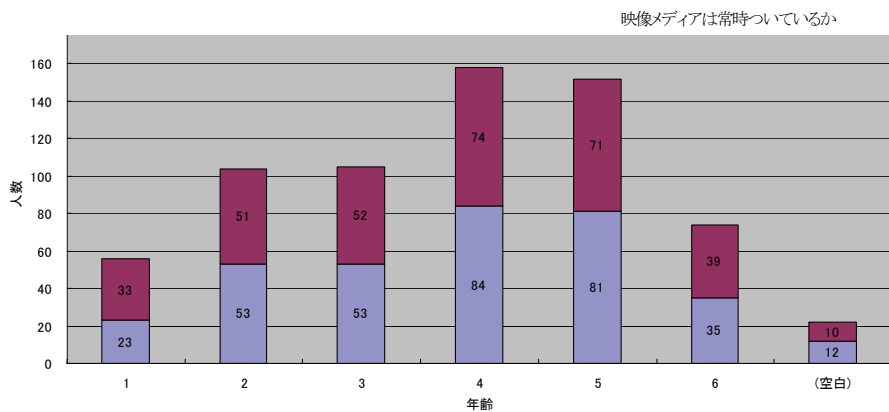
2005 年度、約 3/4 の子どもが室内遊びを好んでいることがわかる。全年齢層の集計だが、年齢比率を考慮すれば、3・4・5 歳児の外遊び体験はかなり低いと考えられる。



テレビ等の視聴時間は2005 年度0 歳児が5 時間を超え、他の年齢層でも4 時間となっていた。2006 年度に50 分ほど減少したが、2 歳児で4 時間を越える平均値が出た。

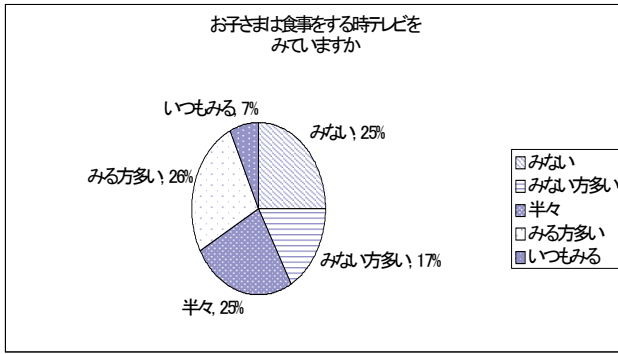


映像メディアが常時ついている家庭は2005 年度では約1/3 だったが、2006 年度では5 割を超える結果となった。

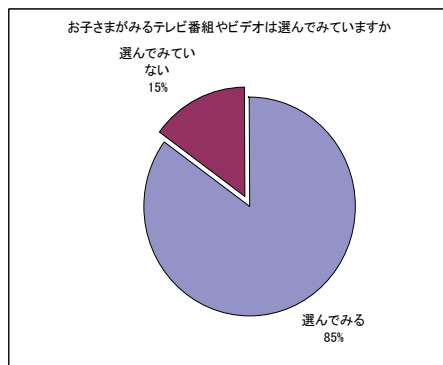
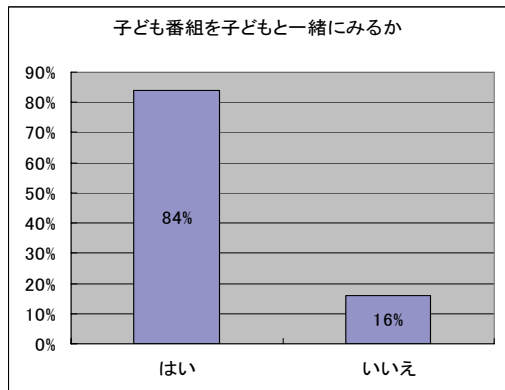
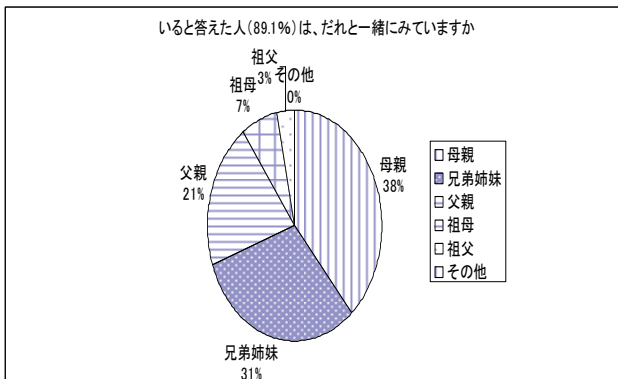
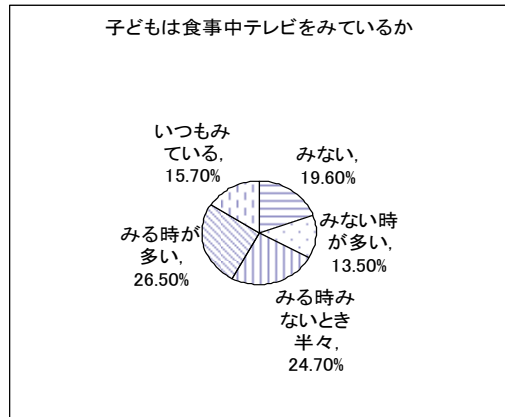


乳幼児の家庭生活とメディア接触環境

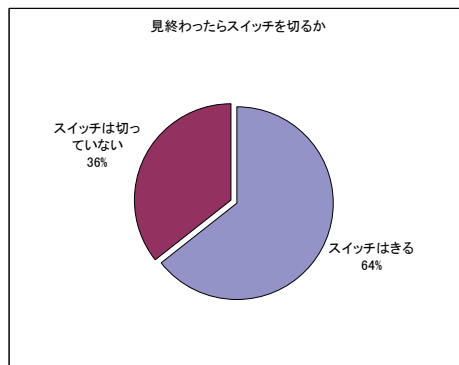
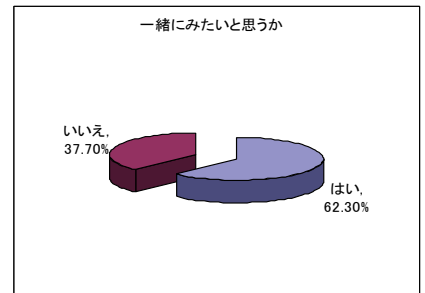
メディアと生活習慣



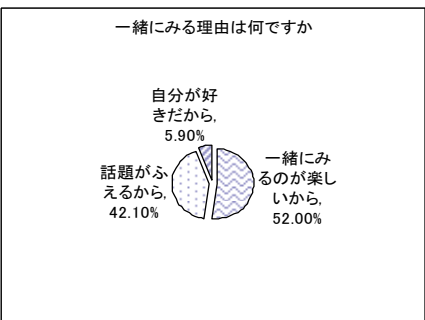
食事中にテレビを見る傾向の家庭は9.2ポイント増えている。



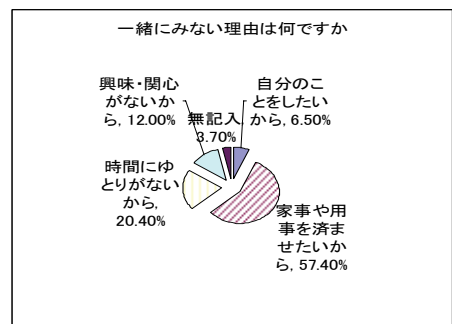
2006 年度調査によれば、テレビを子どもだけで見ている家庭は16%あり、『一緒に見たいか』という問いには、37%が「いいえ」と答えている。

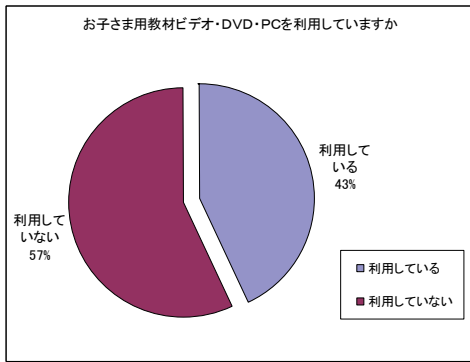


また一緒に観ない理由としては『家事や用事を済ませたいから』が6割近い人が、『時間にゆとりがないから』が2割を超えている。

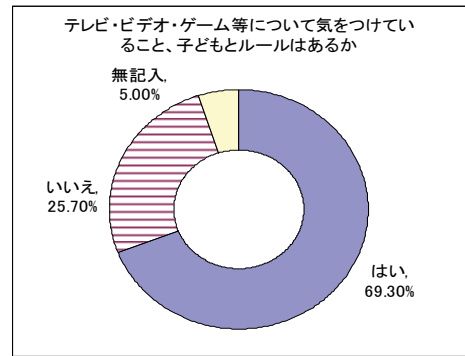


2005 年度調査により、約1/3の家庭がテレビを見終わってもつけたままにしていることがわかる。

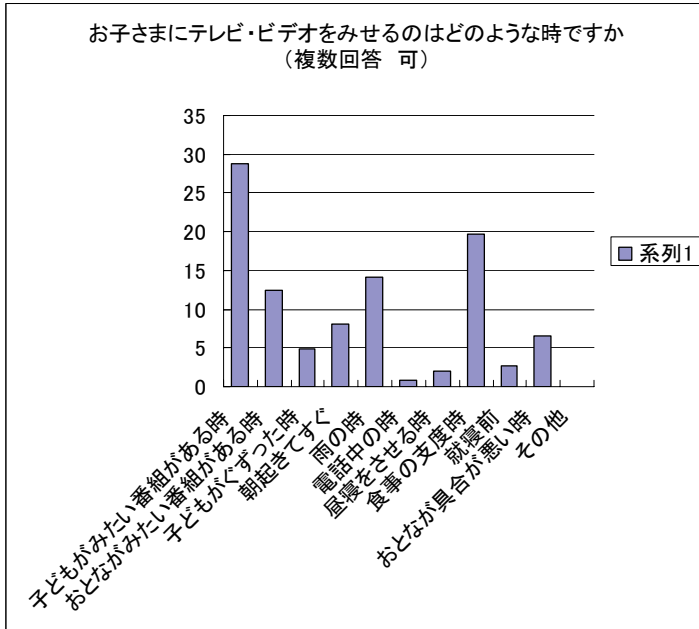




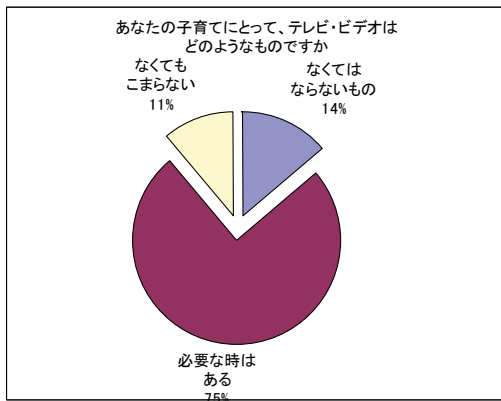
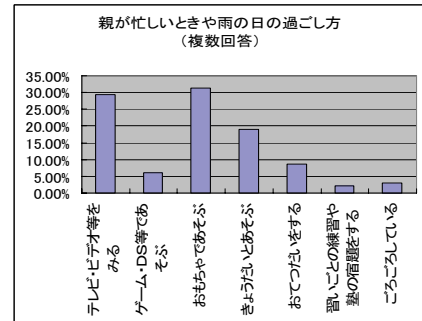
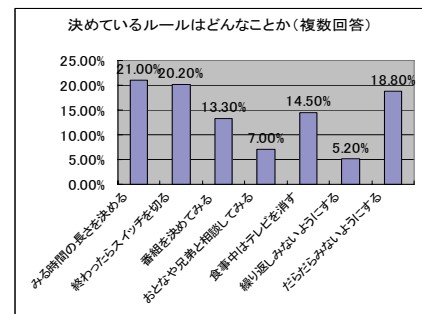
2005 年度調査によれば、子どもの教材としてメディアを利用している家庭は4割を超えていることがわかる。



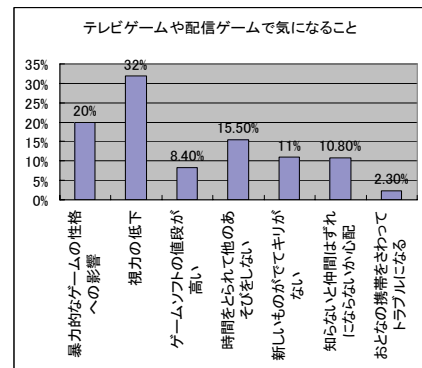
テレビ・ビデオ・ゲームの利用に関してルールの意識を持っている家庭は約7割にとどまっている。



見たい番組を見る子どもは3割以下で、後は大人の都合によって、テレビなどを見ていると考えられる。

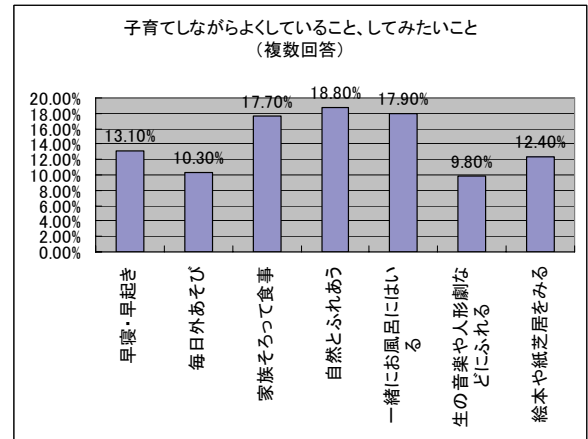
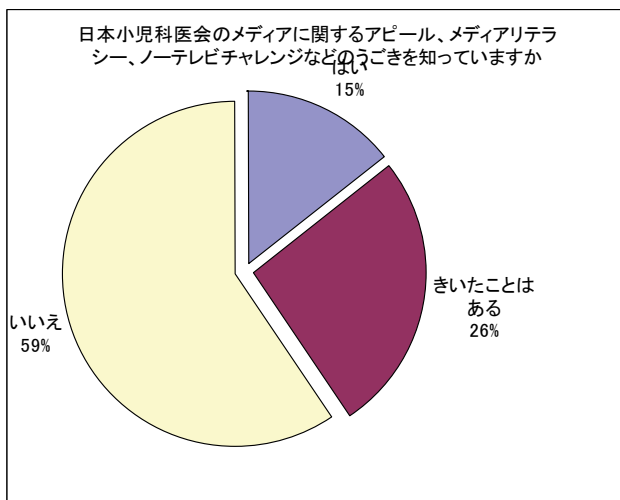
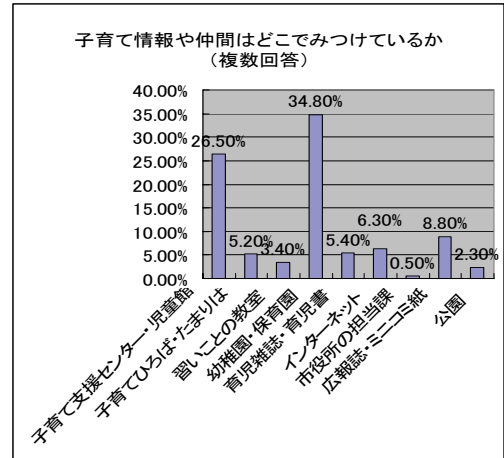
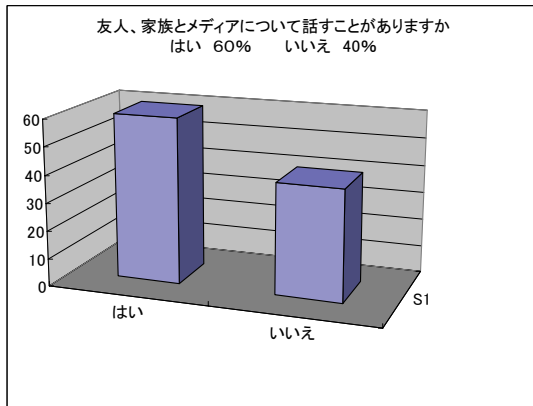


親が忙しいとき、雨の日の過ごし方では、3割の家庭でテレビ・ビデオが利用され、2005年度調査で、『必要なときはある』が9割を超えている



乳幼児の家庭生活とメディア接触環境

メディアリテラシーに対する意識



近年、テレビ・ビデオなどの乳幼児のメディア接触についての危険が言われているが、「聞いたことがある」程度が1/4、知っているのは15%にとどまり、『知らない』人は6割近くおり、こうしたテーマを話題にすることがない人は4割いることが2005年度の調査からわかる。

また、子育ての情報や仲間をどこで見つけるかという質問に対しては幼稚園・保育園が3割強、子育て支援関連施設が1/4程度となっている。

■以上、この調査から明らかになったことは、乳幼児のメディア接触についてのリスクについての意識啓発はまだまだ途上であり、現代の子育て環境においては、テレビ・ビデオなどのメディアは子育てになくてはならない家庭生活の現状が伺える。この課題に対しての改善策として、

- ①メディア接触を減少させる工夫や生活習慣を身につけていくためのアクションプランとして「ノーテレビ」を体験した13家族の報告を掲載した。(p12 参照)
- ②またもう一つの方向性として、子どもの生活文化自体を豊かにしていくリソースとして、遊びや文化芸術の大切さと可能性を啓発する講演記録を掲載した。(p14 参照)
- ③さらに、具体的な体験を通じ、現実の親子の家庭生活を豊かにするプログラムとして全国的に広がりを見せている『アートスタート』の活動を報告したい。(P20～参照)

記述式回答(311人)の声から

1)現 状

★テレビはいつもついていて“だらだら見”をしている……84人

・父(母)がテレビっ子・同居でなかなか消せない・シーンとしていると落ち着かない・テレビが時計がわり

☆食事中ついていて、食事に集中しない……35人

・子ども番組が夕食時と同時 ・朝食時、ニュース、天気

予報をみる ・親自身がホッとしたい

★家事が忙しい時、子どもがぐずった時頼っている……27人

・家事ができるのでビデオで子もり・子どものたいくしのぎに便利・寝起きが悪いので・忙しく、子どもの相手をする時間がない・親が母子家庭でからだ弱い

2)子ども番組について

◇子どもにとってよいものを選んでみせたい……9人

・NHK3ch・「お母さんといっしょ」・「いないいないばあ」・「地球不思議発見」・ディズニーCh・音やリズムのすばらしいもの・おとなと子どもで安心してみられるもの

◆昔のようなほのぼのしたアニメを地上波でみたい……5人

・日本昔ばなし・一休さん・ハイジ・みなしごハッチ・トムソーヤの冒険

◇子どもにみせたくないものもある……15人

・暴力的なもの・人をバカにするもの・言葉使いのひどいもの・怖いニュース・CMいっぱいもの

◆しつけや言葉を学べたり脳をきたえるビデオ・ゲームはさせている……3人

3)メディアリテラシーについて

★ノーテレビデーをやった。やりたい……22人

☆病院で「メディア中毒」のポスターをみた……3人

★メディアのメリット・デメリットを明確にし、広めてほしい……7人

☆子どもが自分でテレビやPCのルールが決められるようにしたい……4人

4)もともとあまりみていない

◆みないことが習慣になっている……16人

◇あそびの方が楽しいようだ……8人

・絵本・お絵かき・トランプ、カルタ・ごっこあそび・いたずら

◆3歳まではみなかったが、最近友達の話についていけず、みている……1人

5) 今、やっていること

- 時間を決めて好きなものだけみる……………15人
- 親、祖父母、兄弟、ともだちと遊ぶ……………9人
- 部屋がさびしい時は音楽をかける……………2人
- ビデオの反復視聴はしない……………つ……………2人
- 「テレビないない日」月曜日がある……………1人

6) 気づき

- ◆アンケートのグラフをかいてみて、長時間ついていたことに気づいた……………8人
- ◇テレビはとても身近にあるツールで、利用についてふりかえることができた……………4人
- ◆提言について、理解までできるが、子どもに合わせた生活はおくれない……………2人
- ◇テレビやビデオは、マイナス面ばかりではない。よいところを利用したい。……………3人

7) なんとなく不安

- ★小学校に行くときゲームをほしがらないか、テレビの話題で友達についていけなくていじめられないか不安……………5人

8) 改善したいこと

- 長時間視聴にならないよう気をつけたい……………58人
- ・みる番組をきめる・終わったらきる・提言のようにしたい・時間をきめる

- ◎食事中はテレビを消したい……………25人
- 家族で話し合ってルールをつくりたい……………20人
- ◎もっと子どもと遊んだり会話をしたい……………9人
- 子どもだけに見せず、一緒にみたい……………5人

以上、2005年度の調査と共に、次の実証検証を行った

A, B, Cコースから選んでチャレンジ!

A:「ノーテレビ」コース

テレビ、ビデオ、テレビゲームをまったくみないコース

B:「一日2時間だけ」コース

つけっぱなしにせず、テレビ、ビデオ、テレビゲーム……合わせて2時間にチャレンジ

C:「食事中と子どもが寝る時刻ノーテレビ」コース

食事中と子どもが寝る時刻、その部屋でノーテレビチャレンジ

「ノーテレビウイーク」に13家族がチャレンジした結果

☆どんなことをして過ごしたの？

お絵かき・パズル・おもちゃ・ダンボールあそび・雪だるま・散歩・絵本・ともだちと遊ぶ・折り紙・レゴ・家族でおはなし・夕飯のお手伝い・ままごと・早くお風呂にはいる。

★家族のようす・困ったこと・「こうしてみよう！」と思ったこと(1)

- ・長時間みていたのは母だった、と判明。これからは食事中はテレビを消すことにする。
- ・土日に苦労した。ちょうど雪が降って、外で遊べた。あれからテレビをみなくてもよくなり、夜も早く寝るようになった
- ・父親の休みの協力が必要だった。朝夕のニュースを消すことに抵抗があった。
- ・いつもみない生活だが、子どもは与えられた娯楽が目の前にあると受け身になってしまいがち。何も無いところからあそびをつくる天才。

★家族のようす・困ったこと・「こうしてみよう」と思ったこと(2)

- ・親子の会話が増え、上の子の学校のようすがきけた。
- ・一週間後にみると、コマーシャルの多さに驚いた。赤ちゃんや幼児に刺激がつよいだらうな、と感じた
- ・1日2時間に制限することによって、4人兄弟の長くなりがちなテレビタイムが短くなった。
- ・幼児向けビデオ・テレビゲームはない生活だが、テレビをみないことで、もっと自分のあそびに集中できた

■期待される効果

- ・アンケートに記入した人が、“だらだら見”、食事中の視聴、に気づき、見終わったら切る、選んでみるなど、家族でルールづくりをし、メリハリのあるつきあいかたをしたい、と考えるようになる。
- ・「ノーテレビウイーク」のとりくみの情報から、メディア接触が少ない時の子どもの姿やあそびを知り、「自分もやってみよう」という波及効果がうまれる。
- ・取り組んだ団体が結果を活用し、「メディアリテラシー」を広げるきっかけにできる
- ・今後の関係者の学習交流により「子どものためのアウトメディア」の環境づくりのネットワークや協働がうまれる。

「子どもとメディア」実態調査		実行委員会委員	
犬塚真由子	大森由里子	岡田 泰子	買場 都明
甲斐久美子	桑原 信子	中川 香子	中嶋 雅美
中村 雪江	野村 圭子	船山 慶子	八藤後恵利
吉田 貴子	綿貫のばら		(50音順)

集計協力: 早稲田大学人間科学部 前橋 明 研究室のみなさま

子どもとメディア接触 ～ 遊びと生活文化のリアル体験を～

基調講演記録

2006年6月16日(金) 13:00～16:45

会場：千葉市民会館 小ホールにて

① 基調講演：「芸術文化・あそびを通じて育ち合う子どもたち」

講演者 牧 裕子(埼玉県・あかね保育園園長)

園生活・カリキュラムに、子どもの表現活動や舞台鑑賞を積極的に取り入れ、子どもたちが心豊かに育つ様子、実例や実体験を、子育て中の親と『アートスタート』の取り組みをしているスタッフ、報道関係者に講演した。

② フォーラム：「子どもとメディア接触～遊びと生活文化のリアル体験を～」

コーディネーター：岡田泰子(子ども劇場千葉県センター理事長)

パネリスト：黒木裕子(子育て広場)

：棚田純子(子育て応援シアター)

：岡田すおみ(子どもとメディア)

：近藤里子(ノーテレビウィーク体験者)

子どもとメディアの実態調査2500枚のアンケート結果をデータで示し、見えてきた子どもの状況とその改善策を提起。

対象者：子ども・子育てNPO 子育て応援者 保育者 教師 教育・文化行政関係者 メディア関係者



あかね保育園園長 牧裕子(まきやすこ)さん

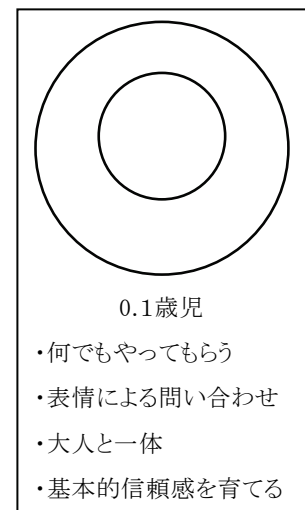
基調講演：「芸術文化・あそびを通じて育ち合う子どもたち」

私は子どもの頃新小岩に住んでいて、夏の年中行事で稲毛や幕張の海岸に潮干狩りに行ったことを思い出しました。40年以上保育の仕事をしていて、子ども時代というものは、その時代こそ、人間のベースをつくるものだと感じています。今66歳ですが、ちょうどわが子の年齢と同じ方々が子育てをしておられます。子ども劇場にお招きいただきとてもうれしく思っています。実は夫の転勤で静岡に住み、子ども劇場にかかわり、観劇などを楽しみにし、そして保育の道に入りました。

子ども劇場は、今子どもたちが生きていく上で、一番大切なことをやっていると思います。文化こそ「おぎゃあ」と生まれたその時からなくてはならないものです。子どもの成長は数字の見える成長も大事で喜びです。それも大事ですが、数字で見えない・計れない大事なところが子どもの感性や情緒です。見えないそのところをどう育てていくのかが今問われています。子どもをめぐる事件が何と多いことか、子どもが殺される、子どもが親を殺す、子どもが子どもを殺す、こんな国ってあるでしょうか。今子育てまっ最中(30代)のお母さんに、どう手を打ったらいいのか、そうしないとお母さんたちが壊れてしまう、それが私たちの課題です。子どもたちも育てると同時に、お母さんたちも手を差し伸べていかなくてはなりません。子どもを生むのはイヤ、怖い、子どもを生むことが楽しくない、ということで超少子化で1.25までできてしまいました。子どもを生むことに何の希望も持てないということに対して、どうやって戦っていったらいいのかと思います。戦うという言葉は好きではありませんが、でも今はがんばらなくてはがんばらなくてはと思います。しっかり手をつなぎあつてがんばっていかなくてはなりません。今日は子どもの発達ということについてお話します。

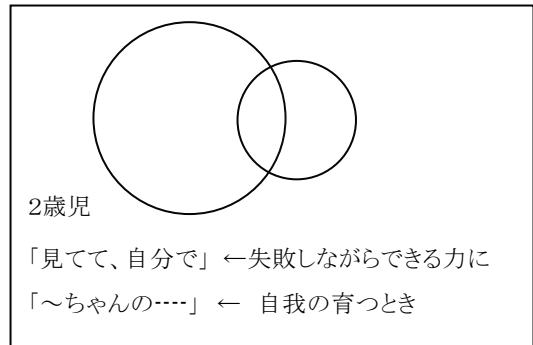
1. 発達の特徴

この絵の小さな○は子どもです。おおきな○は大人です。(大人とは：両親 保育者 祖父母 子どもの周りにいる大人) 0~1歳のとき、たくさんの人にやってもらって育ちます。たくさんを要求をだします。言葉に変わる全身の表情で体を使って、大人に対して「問い合わせ」をしています。子どもの「問い合わせ」について応えてあげなければなりません。大人を試したり裏切ったりしながら、育っていきます。その時大人は無条件で無償の愛で、子どもたちに育児の行為をします。この時期は、親は疲れたり、イヤになっちゃったり、頭にきたりもするのです。育児はそんなにロマンチックなものではありません。こうしたことをしながらお母さんたちも育ち、赤ちゃんに対する愛情も育てているのです。ひとつひとつやりながら育つのです。みんなそうです。この時期の赤ちゃんは生理的的微笑から始まり、4ヶ月頃は誰でもにこにこ、6か月頃になると親しい人にしか笑わない、そのうち笑顔に期待するようになる。「ママ、こっちむいて！」向くと「にこっ」と笑うのです。自分に向かってくれる人の笑顔やしぐさを期待して、その期待に応えようとします。この時期の赤ちゃんは感性ものすごく豊かです。たくさん感性を受け止めるまるで海綿のようです。保育園でこの時期の親子で「太鼓」の演奏会をしました。どんどん・ばんばんと大きな太鼓の音を出しても、赤ちゃんは誰も泣きません。それどころか、すやすや寝ています。太鼓のリズムが心地よさ



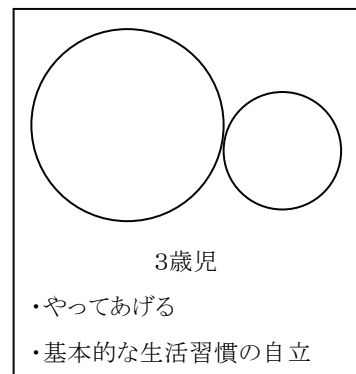
として入ってくるのです。子どもはイヤなら泣きます。それが本能です。

そこで眠れるのはリズムや音が心地よいからです。0歳の赤ちゃんでも受け入れられるのです。毎年観ていますが、今年はひとみ座の人形劇を観ます。お母さんといっしょに見ることが大事で、お母さんの「おもしろい」という気持ちが赤ちゃんに伝わり、このとき人間の基本的信頼感が育つのです。「ぼくに何かあったとき、必ずぼくを助けてくれる人」という太い信頼感が育つのです。基本的信頼感は見に見えるものではありません。今では、基本的信頼感は必ずしも親だけでなく、大人との間に創るもの。三つ子の魂百までも・・と「母子関係の三歳児神話」ということは今は遅れた考え方であり、今は母子関係ではなく、三歳までどんな環境で育つか、ということが大事とされています。



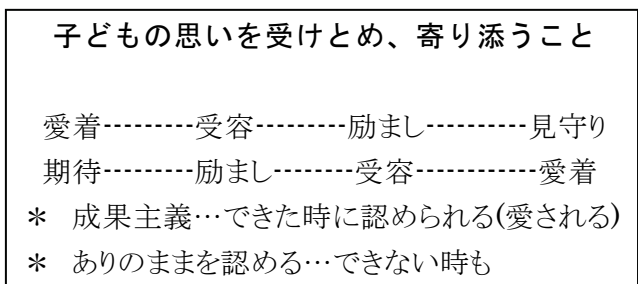
2歳になるとどうでしょう。半分大人から離れます。2歳児は本当に大変です。2歳児をもつ母親の85%が虐待のようなことをしたというくらい「大変でわからんちん」です。「いいの」「自分で」と自分でしようとするができない。「・・ちゃんの」「だめ～」とおもちゃも貸さない。自分の思いがと通らないとひっくり返って泣く、これは見事な2歳児です。それこそ2歳児です。これは自我が育つときです。また見捨てられたら困るということもわかります。大切な自我を大人の力で抑えると、親の前でいい子になり、友達とのトラブルが絶えないということになります。自我は太く育てましょう。

3歳児は、親のひざに来なくなり、友達とあそんだり、・・やってあげると、基本的な生活は自立に向かいます。心はたくさんのもを吸い取る真っ白な海綿のようです。私の園では、1年に最低1回は劇団を呼んでお芝居を見せ、1年に2回は生演奏を聞かせています。3歳児になると、プラス1回は地域の子ども劇場と共催で生のお芝居を観ています。5歳児になると、それにプラスして、1年に1回は劇場（ホール等）に行き観ています。お母さんには、「子どもたちの体に見える栄養もたくさんつけましょう。見えない栄養にも心を配りましょう。園では様々な文化的な行事を通じて、子どもたちに中の育つ情緒・感情が育つのを大事にしています」と伝えます。もう手遅れということはありません。子育ては気がついたときからやればいいのです。



2. 子どもの思いを受け止める を大事にしたい

人生は自分で選び、自分で決めることができるからすばらしいのです。親の敷いたレールを走れば幸せになると、仮に思っても、子どもは別の道を行きたくなるのです。子どもは失敗して傷ついたり、また戻ることもあります。2歳児



は自己選択・自己決定ができる年齢といわれます。自分の着るものを選びます。暑いのにミッキーの絵のついた長袖のトレーナーを着ようとします。その決定を認め付き合うことです。そうしたことで子どもは自分に存在・意思決定を認めてくれたということで安定します。それからです。それから切り返して子どもに「..ちゃん、だけど、ママも暑いから半袖にしたの。この半袖の洋服から選ぼうか。(子どもの選択肢を増やす)あとで寒くなるといけないからこの長袖はママが持っていくね」といえば、もって行かなくてもいいのです。こうしたやりとりで子どもはたいがいそんなことは忘れていません。今、子どもが最初「こうしたい!」といったことに、なかなか親が付き合えないのです。

なぜか？大人はその先が見えるからです。たとえば出掛けに「おしっこは?」と聞くと「ない。ないの!」と言う。大人は5分後に必ず「おしっこ」ということがわかっている。大人はその「ない」に付き合うのです。「そう出ないのね。じゃいいよ」と認めてあげる。そして玄関のトイレの側まで行って「そうだ、トイレずっとないんだよね。どうしよう、おしっこしていく?」ともう一度言うと、するっとおしっこをします。子どもの気持ちにしっかり付き合うことによって、子どもの自我や自己決定する力を育てていくのです。子どもたちの気持ちを受け止めて(親だけでなく周りの大人から受容される)、まわりの大人とのしっかりした愛着関係を築き、ここにいいんだという関係を広げながら、見守られ励まされていくのです。例としてアエラに掲載された「受験勉強をコーチする仕方をお母さんに教える」という仕事があるという。そうされた子のいく先が見えて辛いですね。ある例ですが、鈴木式メソッドというバイオリン教室に行かせている親がいて、練習がマニュアル化され、目標が立てられていて、それをできなかったことでお母さんが本当に深刻に悩んでいたのです。相談を受けました。「お母さんそんなにがんばらなくていい。子どもの人生は鈴木式バイオリンで一生を生活していくわけではないでしょ。」といいました。私も親としても保母になってもたくさん失敗しました。

コミュニケーション能力を育てる

対話能力 自己表現能力 他者を受け入れる能力

子どもが選び取る力は、乳幼児の時期に育つ。「おもしろかった!」「キレイ。ステキ!」「悲しい!」と感動する体験の積み重ね、「できた!」「みて!」という充実感や達成感が積み重なっていれば、失敗もしたり、飛び出したり、その中からまた必ず元に戻れると信じています。そうした子どもの見えない所を育てていくのが芸術文化ではないかと思えます。数年前、プークの「おばけちゃん」を園で呼んで観ました。その後2年間「おばけ劇場」が園で流行り続きました。劇場ごっこですが、おばけジュースを作ったり、どんどん子どもたちが変えて劇を作っていくのです。そうした自己表現能力、人と会話する能力が、他者を受け入れる能力となり自己選択・自己決定につながっていくものと思えます。

子ども文化

「人間の文化の中で、独自の位置を占める。子ども文化のあり方が子どもの成長に大きく関係する」

「やせた土地に種をまいてもダメ、豊かに土壌を耕すことが感性を育てる」

「子ども自身に良質な文化を見分ける力はない。大人の責任である。」

最後に、子どもたちを豊かに人間らしく育てたいと思えます。人間らしく育つときに、痩せた土地に種をまいてもダメ。豊かな土壌を耕すことが感性を育てる。子どもたちに豊かな文化を届けること

が子どもの感性を育てることになる。でもそれは見えないことです。見えないころにお金をかけるのはもったいないような気がします。そうではありません。子どもに良質な文化を与えるは大人の責任です。子ども劇場は良質な舞台芸術を届けるだけでなく、今や親も育ち、親の子ども観も育つ役割も担っています。0・1・2・3歳に向けた活動を活発にされていることを大変うれしく思っています。保育園などもどんどん使って是非連携して広げてください。そうしたことを希望される保育園もあるはずです。

(文責:中村 雪江)

子ども文化を豊かに

子どものどのような活動を大切に、子どもたちに、どのような文化財を与えていくのかをよく考え、子ども文化を見る目を豊かにしていく。

子どもが直接、人や自然に働きかけて、五感で世界を感じ知っていくように心を配る。

- * 自発的活動
- * 動物を飼育、植物を栽培、自然にふれる
- * 人に働きかけていく遊びや活動
- * 想像の世界、内面の世界を豊かに
- * 感動する体験、楽しい体験

